

ビバハウス便り NO.99 「ビバ農業実践塾」具体化に着手！

2014年7月7日 ビバハウス 責任者 安達 俊子

これまでの安定しない不順な天候が一変し、連日快晴ばかりが続いている。わがままなもので、あれほど雨の日を嫌っていたのに、そろそろ雨が来ないと干上がってしまうとの声ばかりだ。

この晴天を利用し、ビバ・モンガク農場では、すでに数週間、年間を当して農作業が出来る条件作りの作業を実施している。2階建てのプレハブの屋根からの雪やツララの落下の危険を防ぐために、すでに軒下に子屋根の敷設を終了した。本部になる建物も面目一身の屋根のペンキ塗りかえも6月末で終了し、周囲の草刈も完了し、看板も整備されたので、道道赤井川線の車からも一目で見えるようになった。

「ビバ農業実践塾」構想も、前号でお知らせしたように、北海道農業のリーダー的存在の長谷川豊先生（農業塾風のがっこう理事長・前酪農学園大学教授）と「連合北海道」（工藤和男会長）・北海道農ネットの皆さんの全面的な賛同で、着々と諸準備が進んでいる。

ほぼ通年的農作業が出来るようにと、連合傘下の皆さんのご協力で、約100坪ほどのビニールハウスの資材が頂ける事になり、近日中に、長谷川先生とともに、現在設置されている内浦湾の豊浦まで引き取りに行く事も決定した。比較的気候条件に恵まれている余市で、冬期間にも野菜の生産準備をし、札幌（小金湯）農場と連携し、より効率的な農業経営を目指す事にした。

定年退職者を主体とした札幌農場と、若者が主体のビバ農場との共同運営で、個々の力では実現できなかった、それぞれの課題解決を目指している。

ビバにとっては、これまで努力してきたが、なかなか具体化できなかった、農業実践を通して、若者たちの自立への基礎力量を蓄えさせる道筋がいよいよ近づいてきた。この計画実現のために、一定の先行投資が必要とされているが、この点についても、連合傘下の全織同盟の皆さんのご協力で、イオン余市、マックスバリュウ倶知安両店の社会貢献事業（幸せの黄色いレシートキャンペーン）のカンパの対象団体に推薦して頂いた

前回の余市教育福祉村の理事会での、人事提案の問題点の責任を取って、菊地理事長が理事を辞任し、希望する方に理事を続けてもらいたいとの緊急事態解決のため夫は自ら理事を辞退し、菊地理事には留任して欲しいと申し出て、村創設以来の理事職を辞任した。もともと2002年の「精神障害者地域生活支援事業・グループホーム」認定のため、当時法人格を持たないビバハウス（NPOビバハウスの発足は、発足間もないNPO余市教育福祉村との両立は厳しいのではないかとの声もあり）は組織的に余市教育福祉村の一翼として認定された。ビバは現在有限会社を持っているので、現在法人変更の手続き中である。

